

アートプロジェクト

家族の夕食のための絵画

2008年、イスラエル・パットヤム美術館での展覧会に向けて、「家族の夕食のための絵画」というプロジェクトを始めた。地域の家庭に「夕食に招待してくれたら絵を贈ります」と呼びかけ、果物の静物画に「夕食をありがとう！」という言葉添えて制作し、それを持って家族の食卓に参加した。会話にはガイドラインを設けず、自然な交流を大切にした。食後、家族全員とソファに並び、背景に絵を掛けて記念撮影を行い、その絵はそのまま家族に贈った。こうした家庭の中での出会いとやりとりが、アートと生活の境界を越えていくきっかけとなった。

この取り組みはイスラエルから、アメリカのブロンクス、中国・北京、イタリア・レッチェ、日本・東京へと広がり、これまでに51家族が迎え入れてくれた。2021年には東京ビエンナーレの「ソーシャルダイブ」にオンラインで参加し、Zoom越しに夕食をともにする形で実施した。2025年にはドイツ・ドルトムントで6カ国の実践を紹介する展覧会が開かれ、ジャーナルやレシピ、記録写真などをまとめた出版物も刊行される予定である。さらに、同年の千葉国際芸術祭では日本での対面実施が計画されている。

本プロジェクトは、絵画や夕食という形式を超えて、贈与と感謝、対話と共同創作を通じて社会的なつながりを編み直す実践である。私的な空間にアートを持ち込むことで、公共と私的の境界を再構成し、文化的・社会的な次元を家庭に注ぎ込む。参加する家族は観客ではなく、共に作品をつくる協働者であり、その場に生まれるやりとりこそが作品そのものとなる。この実践を通じて、アートが人と人との関係を開き、日常の中に社会的想像力をもたらす力を信じている。

市民参加のかたち：リサーチ対象・制作参加・展示鑑賞



©Alina Blumiss, Jeff Blumiss
Photo by Dafna Gazit



©Alina Blumiss, Jeff Blumiss
Photo by Du Yang

Alina Blumiss and Jeff Blumiss (アメリカ)

アリーナ・ブリュミス & ジェフ・ブリュミス

ベラルーシのミンスク（Alina／1993年）とモルドバのキシナウ（Jeff／1974年）からニューヨークへ移住し、School of Visual Arts（Alina／1999年）とコロンビア大学（Jeff／1980年）を卒業した。移住の経験は、アーティストとしてのアイデンティティを探究する出発点であり、作品にとっても重要なインスピレーションの源である。個々の作品ではなくシリーズを通して社会的・政治的なテーマを探究する、リサーチベースのアプローチをとっている。多くのプロジェクトは長期的に展開され、視覚表現の幅を広げるために複数のメディアを用いている。物理的・政治的・社会的な境界を越えることは、キャリアを通じて一貫した関心の対象である。「内と外」「境界と中心」「他者と規範」といった関係性に問いを投げかけ続けており、創造的姿勢は「外在性」にある。政治的な問題を美的な体験へと転換することで、「断絶」や「他者性」といったテーマを日常に持ち込み、そこに潜む「異国性」の違和感や裂け目を浮かび上げようとしている。